

平成 28 年度地域づくり海外調査研究事業調査報告書

**異文化における芸術文化施設の機能について**

**～滝川市への示唆～**

調査① 調査地:シンガポール

(ナショナルアーツカウンシル・シンガポール)

調査日:平成 28 年 6 月 28 日

調査② 調査地:タイ バンコク

(シリントーン人類学センター)

調査日:平成 28 年 7 月 1 日

一般財団法人 地域活性化センター

総務企画部 研修交流課 安樂 良太

# 目 次

|                                          |      |
|------------------------------------------|------|
| 1 はじめに ～滝川市の状況と調査目的～                     |      |
| （１）滝川市の概要                                | P. 2 |
| （２）滝川市の芸術文化施設について                        | P. 2 |
| （３）地域づくり海外調査研究事業における調査の目的                | P. 3 |
| 2 ヒアリング調査①                               |      |
| シンガポール「ナショナルアーツカウンシル・シンガポール」             |      |
| （１）シンガポールの芸術文化振興とナショナルアーツカウンシル・シンガポールの概要 | P. 4 |
| （２）アートハウジングスキームについて                      | P. 5 |
| （３）アートハウジングスキームの活用事例                     | P. 6 |
| 3 ヒアリング調査②                               |      |
| タイ・バンコク「シリントーン人類学センター」                   |      |
| （１）シリントーン人類学センターの概要                      | P. 7 |
| （２）タイ国内のローカルミュージアムについて                   | P. 7 |
| （３）ローカルミュージアムの事例                         | P. 8 |
| 4 まとめ                                    | P. 9 |

## 1 はじめに ～滝川市の状況と調査目的～

### (1) 滝川市の概要

滝川市は、北海道のほぼ中央に位置し、石狩川と空知川に挟まれた平野部に広がっている。土地はおおむね平坦で、東部はゆるやかな丘陵地帯となっている。気候は、夏と冬に気温の差の激しい内陸性気候で、年平均気温は7度前後。雪は11月下旬から降り始め、4月上旬まで続く。基幹産業は米を中心とした農業であり、なかでも菜の花の作付面積は日本一(平成28年度 177ha)である。

明治23年の開村後、屯田兵が入植し開拓が進められ、上川道路(現国道12号)の開削、上川鉄道(現函館本線)や下富良野線(現根室本線)の開通により、資材や生活物資の流通で栄え、周辺産炭地域・農業地域に支えられながら、交通の要衝としての地勢を活かし、商業・サービスのまちとして発展した。それに併せて市街地を拡大し、交通網や生活基盤を充実させ、福祉施設、スポーツ施設、芸術文化施設などの各機能の配置も含め、多くの公共施設を整備し、魅力ある都市づくりに取り組んできた。

人口は43,170人(※平成22年国勢調査時)。日本社会が成熟し、少子高齢化、価値観の多様化などにより経済全体の縮小や人口が減少していくなか、滝川市においても、近隣の産炭地における相次ぐ炭鉱の閉山とそれに伴う関連産業の衰退などの影響を受け、昭和58年をピークに人口の減少が続いている。



滝川市ホームページより

### (2) 滝川市の芸術文化施設について

公共施設のうち、芸術文化施設については、文化センター(大ホールなど)や陶芸センター、美術や歴史民俗の各分野を扱う博物館などを昭和40年代後半から計画的に配置し、そのエリアは「文化ゾーン」として市民に親しまれてきた。

しかし、少子高齢化等による社会的環境や市民ニーズの変化、施設の老朽化などが生じており、芸術文化施設の改修とともに効率的な運営、文化ゾーン全体としての魅力づくりなど、芸術文化活動支援や施設の今後のあり方が問われている。

そのような中、平成27年度に市と文化関係NPO、市内芸術家等が連携し、文化ゾーンの今後について検討をスタートした。その内容は文化ゾーンにある芸術文化活動・生涯学習活動を行う「施設」とその活動を支える「人」を地域資源と位置づけた事業を展開し、それぞれの施設の新たな魅力を引き出すとともに、世代間交流や新たな学びの機会をつくり、芸術文化・生涯学習を軸に据えた新たなかたちでの地域コミュニティの構築、充実を目指すものである。

なお、滝川市が実施した平成25年に40代～50代の市民を対象とした「滝川市民生涯学

習・活動アンケート調査」によれば、回答者のうち生涯学習活動への取り組み状況は51%、また、これから生涯学習活動に取り組みたいと考えている人は76.3%であり、多くの市民が個人としての学びや地域とのつながりを将来にわたり求めている状況にある。

#### 【芸術文化施設の状況】

| 施設名    | 運営形態 | 建設年     | 概要                              |
|--------|------|---------|---------------------------------|
| 文化センター | 指定管理 | 昭和 48 年 | 1,101 席を保有する大ホールと展示ギャラリー、会館棟で構成 |
| 郷土館    | 市直営  | 昭和 52 年 | 歴史民俗の博物館                        |
| 陶芸センター | 市直営  | 昭和 53 年 | 陶芸講座を実施                         |
| 音楽公民館  | 指定管理 | 昭和 56 年 | 主に音楽活動の練習、発表に活用                 |
| 美術自然史館 | 指定管理 | 昭和 61 年 | 美術部門と自然史部門を併せ持つ博物館              |
| こども科学館 | 市直営  | 平成 3 年  | 中央児童センター 3 階にある科学部門の博物館         |



文化センター



美術自然史館



郷土館

### （３）地域づくり海外調査研究事業における調査の目的

前述のような現状を踏まえ、地域づくり海外調査研究事業（以下「海外調査」という）においては、日本とは異なる芸術文化の歴史をもつ他国の芸術文化施設の活用とそれを通じた芸術文化活動の支援・育成や、その他地域にもたらす効果等のヒアリング調査を行い、滝川市における芸術文化施設などをどのように活用していくべきか考察することとする。

調査地としては、①シンガポール、②タイ・バンコクの２か所を選定した。①シンガポールでは、建国して 50 年余りと歴史は浅いが大きな経済発展を遂げてきた国における芸術文化活動の位置づけと公共施設の活用事業「アートハウジングスキーム（Art Housing Scheme）」を中心に調査し、②タイ・バンコクでは仏教を中心とした長い歴史をもつタイにおける独特な博物館発展の事例「ローカルミュージアム（Local Museum）」について調査した。

## 2 ヒアリング調査① シンガポール「ナショナルアーツカウンシル・シンガポール」

### (1) シンガポールの芸術文化振興とナショナルアーツカウンシル・シンガポールの概要

シンガポールは、面積 718.3 平方キロメートル（2014 年 6 月）の狭小な国土、人口 5,469,700 人（2014 年 6 月）の限られた人的資源という制約のもと、政府主導の開発主義政策によって形成されてきた国家であるとともに、中華系、マレー系、インド系の住民が共生する多民族社会である。1965 年にマレーシアから独立したが、経済発展が国家存続を左右する喫緊の課題であったため、政治や社会のすべてが経済発展の手段とされ、急成長を遂げていった。そのため、シンガポール唯一の資源である「人材」の能力育成に注力し、競争的な教育制度、能力主義社会が確立された。なお、シンガポールの能力主義は民族間の軋轢をかわす仕組みとしても機能している。

一方、経済発展のための人材育成に注力した結果、芸術文化は不要なものとして排除されていき、発展する余地がなかったといえる。

経済発展を遂げた 1980 年代後半になると、シンガポールではそれまで着手していなかった芸術文化の創造に向けた政策をスタートした。1989 年には文化芸術諮問会議（Advisory Council on Culture and the Arts）により「文化的活力を持った社会を 1999 年までに実現する」というビジョンが示された。その中にはナショナルアーツカウンシル・シンガポール（National Arts Council, Singapore）の設立についても提言されている。

さらに 2000 年からはルネッサンス・シティ・プロジェクト（Renaissance City Project）をスタートし、芸術文化や芸術教育の振興や才能発掘、育成などをさらに推し進め、芸術文化を通じたシンガポール国内のアイデンティティ創出を目指してきた。

ナショナルアーツカウンシル・シンガポールは、1991 年 9 月に設立されたシンガポールにおける芸術文化振興の中枢を担う専門機関である。

アーツカウンシル（Arts Council）とは、「芸術文化に対する助成を基軸に、政府・行政組織と一定の距離を保ちながら、文化政策の執行を担う専門機関」であり、世界各国で設置されている。それぞれ国の特性や文化政策の方針に沿った事業、運営が行われており、その発祥は、1945 年イギリスだとされている。

ナショナルアーツカウンシル・シンガポールでは、シンガポールが芸術文化の面でも活力あるグローバル都市に発展していくことを目指し、地元アーティストの育成をはじめ、広く国民が芸術文化に触れる機会の提供、芸術団体やアーティストへの助成金の支給、文化施設の運営などを行っている。



ナショナルアーツカウンシル  
シンガポール 門前



## （２）アートハウジングスキームについて

アートハウジングスキームは、老朽化した公共施設などを改修し、シンガポール国内の芸術団体・個人に貸し出す事業であり、1985 年から実施している。これまでに約 50 軒の改修(ヒヤリング時)を行ってきた。

シンガポールは国土面積が小さく土地の使用に限りがあるため、芸術家個人が活動するための新たな関係施設を建設することは難しいという。そのような状況で芸術家が長期間集中して作業する場を確保するためには、土地・建築物の効率的使用が不可欠となっている。



ナショナルアーツカウンシル  
シンガポール ヒアリング風景

アートハウジングスキームで改修された施設は、芸術家のアトリエやリハーサル、セミナー会場、作品の保管庫、住民を対象にした芸術ワークショップなどに活用されている。

アートハウジングスキームで改修した施設を貸し出す際は、賃貸料の 90%をナショナルアーツカウンシル・シンガポールが助成している。賃借料が安価で済む環境を整備したことで、芸術家は作品・活動に集中的に資金を投資することができ、芸術活動の質向上につながっているという。

アートハウジングスキームによる副次的効果として、借用した芸術家間の交流にもつながっており、芸術活動への相乗効果も期待できる。また、改修した施設の近隣地域を対象に、芸術家と地域住民が一緒につくりあげる芸術プログラムなども開催されており、芸術を中心とした新たな交流が地域に生まれている。

ナショナルアーツカウンシル・シンガポールの施設も元は学校であった施設をアートハウジングスキームによって改修したものである。施設内にはナショナルアーツカウンシル・シンガポール事務所以外に複数の芸術家（団体）が借用している他、防音室(30 室ほど)や体育館、演劇スタジオなど関係者以外でも利用できる貸スペースを設置している。貸スペースの賃借料は、一般企業、非営利団体、関係者の区分で段階的に設定しているという。

※以下、ナショナルアーツカウンシル・シンガポール 施設内の写真



外観



防音の会議室



体育館



演劇スタジオ



コンテナを組み合わせた貸スペース



コンテナ内部

### (3) アートハウジングスキームの活用事例

アートハウジングスキームで改修した施設のうち筆者が視察した施設オブジェクティブス (Objectifs) を紹介する。

オブジェクティブスは、2003 年に開設された写真や映画に関する活動を専門とする芸術センターである。オブジェクティブス内には、展示ギャラリー、スタジオ、ワークショップスペース、展示用の屋外中庭などがあり、芸術家の育成や新たに芸術に触れる人を増やすことを目指した教育プログラムの実施や展覧会、地域への奉仕活動などを行っている。

筆者の視察時には、スーパーヒーローミー (Superhero Me) という展覧会が開催されていた。スーパーヒーローミーは、子どもたちの豊かな心や発想を育むべく 2014 年から開催されている取組で、4 歳から 21 歳までの 60 人以上の子どもや青年が参加している。

展覧会の期間中は、工作ワークショップ、人形劇のセッション、ストーリーテリングなど子ども達が楽しむためのイベントも行われる。



オブジェクティブス 外観



スーパーヒーローミー  
展示

### 3 ヒアリング調査② タイ・バンコク「シリントーン人類学センター」

#### (1) シリントーン人類学センターの概要

シリントーン人類学センター (Sirindhorn Anthropology Centre) は、マハー・チャクリ・シリントーン王女 (Princess Maha Chakri Sirindhorn) の生誕 36 年を記念して、シラパコーン大学、バンコク都、国が 1991 年に創設し、1999 年に開所した非営利の学術機関である。

シリントーン人類学センターは、タイ国内の人類学資料の収集や分析、デジタル化を経て情報公開していくことを目的としている。具体的には、人類学的知識の普及、人類学とその関連分野の新しい研究開発、調査研究の発展および人類学的資料の収集・集積を通して学術研究を推進することである。



シリントーン人類学センター 外観

#### (2) タイ国内のローカルミュージアムについて

タイ国内では、西洋型の博物館ではなく、独自に発展した博物館のモデルが存在する。1980 年代後半以降、タイの各地で仏教的な伝統、寺院を取り巻く文化がベースとなった「ローカルミュージアム (Local Museum)」が創設されていた。

タイ全国のローカルミュージアムの実態が明らかになってきたのは、シリントーン人類学センターがローカルミュージアムの調査や支援、ネットワーク化等に関する包括的なプロジェクトを開始して以降のことである。



シリントーン人類学センター  
ヒアリング風景

シリントーン人類学センターでは、文化遺産を保護するうえでのローカルミュージアムの果たす役割に注目し、2003 年から 2008 年にかけて「ローカルミュージアム研究開発プロジェクト (Local Museum Research and Development Project)」を実施した。このプロジェクトでタイ国内のローカルミュージアムのデータベースを作成するとともに、機関誌の発行や交流集会の開催などを通してローカルミュージアム同士のネットワーク構築を行った。初めは、調査員が各地域コミュニティに 1 年間滞在し、ローカルミュージアムだけでなくコミュニティ全体を調査対象とし、その中でローカルミュージアムの位置づけ・機能について分析していった。

そもそも 1980 年代後半からローカルミュージアムが増加していった背景には、各地域コ



コミュニティでの生活様式の変化などがある。古くからの歴史が途切れることを恐れた高齢者が寺院やその地域の歴史をまとめて公開したり、少数民族がその地域から追い出されないよう自分達のアイデンティティを残すために開設していったという。今ではローカルミュージアムの形態も多様化され、地域で発見された遺跡を公開するために開設したものや、一個人の趣味（コレクション）を公開するものなど、その地域特有なカタチで運営されている。

シリントーン人類学センターが存在を確認したローカルミュージアムは1,436 館（ヒアリング時）であり、内訳は寺院によって運営されるものが27 パーセント、学校が20 パーセント、個人が16 パーセント、自治体が9 パーセント、地域コミュニティが6 パーセント、非営利団体が2 パーセントである。

### （３）ローカルミュージアムの事例



タイの伝統的な影絵  
ナン・ヤイ

各ローカルミュージアムがその地域でどのように機能しているのか、その取組と効果について2つの事例の話を伺った。

1つ目の事例として、タイ東部のラヨーンにあるワット・バン・ドン ミュージアム (Wat Ban Don Museum) では、タイの伝統的な影絵「ナン・ヤイ (Nang Yai)」に使う道具を展示している。ワット・バン・ドン ミュージアムでは、展示のほか若者が中心になり道具の修復やナン・ヤイの実演を行っており、大学に若者を派遣してその技術を伝えるなど、ビジネスとしての活動も行っているという。その影響もあり、ナン・ヤイを行う若者が増え、地域に戻ってきて次世代のリーダーを担うようになってきている。

2つ目の事例、タイ北部のチェンライにあるローカル・トイ ミュージアム (Local Toys Museum) は、地域の高齢者が開設したものであり、高齢者自身が収集した子ども向け玩具の展示を行っている「遊べる博物館」である。ローカル・トイ ミュージアムが開設されたことにより、地域に子どもの新たな交流の場ができただけでなく、昔ながらの遊びを通じた「地域の伝統をつなぐ場」が生まれた。また、開設した高齢者にとっては、開設までのプロセスや子ども達との交流が、私生活での生きがい、地域での役割（存在価値）の創出につながり、心身の高齢化を予防するリハビリ的役割を担っているという。



ローカル・トイ  
ミュージアム

タイ国内すべてのローカルミュージアムの運営が順調であるわけではないという。しかし、地域で上手く機能しているローカルミュージアムには共通点がある。それは展示など見せるだけのプログラムではなく、モノや活動による体験・交流を通じて、人と人が関係性を深めていくプログラムが組み込まれていることである。

#### 4 まとめ

シンガポールのナショナルアーツカウンシル・シンガポールでは、芸術家の育成やその先にある芸術文化産業の活性化という明確な目的を設定し、それに向けた綿密なリサーチを行い、公共施設を有効活用していた。また、タイ国内のローカルミュージアムにおいても地域で機能している博物館には、明確なミッション、活動の発展性のようなものが確立されていた。

滝川市における芸術文化施設は、広く市民に向けた活動の場、学びの場としての「場の提供」や「その場で行う芸術文化活動」に目的が設定されている。本調査で得た新たな気づきは、教育による学びのプロセスや教育成果のみに目的を限定せず、その先にある自己実現などを目的とした「行政の縦割りにとらわれない教育の仕組みづくり」が重要なのではないかということである。

芸術文化活動を通じた豊かな学びや郷土愛の育成などは、滝川市にとってなくてはならないものだとの認識した。ただし、それだけにとらわれることなく、例えば、その先により専門的な教育の場を設定し、専門家(プロ)を養成するプログラム作りや、教育分野以外の観光や産業振興、保健福祉分野などに関するまちづくりと既存芸術文化施設の機能が連携していくことで、より芸術文化施設の存在価値が明確となり、地域にとってなくてはならない施設になっていくのではないだろうか。

私は、教育は「まちづくりへの投資」だと思っている。まちづくりとは市民の生活を支え豊かにしていくことであり、そのために具体的に機能できる施設のあり方をこれからも検討していきたい。

最後に、今回の調査にあたり、快く視察を受け入れていただいた、ナショナルアーツカウンシル・シンガポール及びシリントーン人類学センターの皆様、日程調整に多大なご協力をいただいた一般財団法人自治体国際化協会シンガポール事務所の皆様、通訳の南出明子氏、ホンサワッディ氏に心から感謝を申し上げ、本報告書の結びとさせていただきます。



ナショナルアーツカウンシル・  
シンガポールにて



シリントーン人類学センター  
にて

---

【参考文献・資料】

- ・ 滝川市(2012)「滝川市総合計画（2012～2021）」
- ・ 滝川市(2013)「滝川市民生涯学習・活動アンケート調査」
- ・ 吉本光宏(2001)「シンガポールの文化政策に学ぶー独立行政法人を中核に自由貿易都市から Cultural Hub City へー」ニッセイ基礎研究所
- ・ 吉本光宏(2015)「地域アーツカウンシルーその現状と展望」ニッセイ基礎研究所